

小雨けむる10月22日午前10時、私たち教育委員一行7名は、ガイドの藍玲（ロレイ）さんに案内されて漓江下りの船客となる。

玲さんは華南出身で四年制大学を卒た才媛であるが中国人であるのか日本人であるのか私たちは迷った。それは、言葉や風貌でない良い意味で、大陸性であるのか或は職業か



船上生活者

らくる民族意識のうすらぎか、ともかくも中国を客観的に説明してくれている。

順次船客は増えてくる。

「中国の乗り物は便利です。時間は目安です。お客さんが一杯になるとすぐ出ます。」と云う。まさしくその通りです。

「桂林の景崖は小雨が最高で、みなさんは運がよかったですね。」と付け加える。小雨にけむる山岳かすみか、はた

ホテルのボーイさん、それよりも教養も深く極めて美人であり、敬愛おくあたわざるガイドの玲さん。何故中国人が中国人を卑下するんだらうか。これが中国流謙虚と言うなれば21世紀は「未しの感」であらう。

船が進む。突然歓声が上が。ポンカンの皮を川に投げ。数名の子どもたちが素裸で飛び込んでこれを拾う。物を乞うことを観光の一コマと

船はずでに4時間30分を過ぎた。下船に近づくころ、川辺に邑が浮かぶ。いわゆる船上生活者である。日本には絶対に見られない貧しい生活環境である。

突然、またも異様な歓声がある。見ると太竹四本で筏をつくり、川中に観光船を待つ。一人が船側にしがみつき一人が果物を売る業者で、まさに必死の文字そのままだしがみつき、こらえきれなくな

中国を視る

またまぼろしか、なるほど絶景である。だが、時として電柱が見える。電柱乱立の中に生活している我々が、たか一本か二本の電柱が気になる。環境のなせるわざでありましょう。

「この船には中国人は乗せません。」と胸をはる。「何故か?」「中国人お金ない。中国人清潔になれない。だから乗せない。」と云う。

言葉は通じないが、親切な

しているのか。ガイドさんの説明がつづく。「あなた何故笑わない?私の話しに興味ないのか?」と私をなじる。我々は、国は異なるが教育の場の一団である。投げ捨てる人

にどなりたい衝動にかられているのである。物を投げて、手をたたいているのはどこの国の人かと私は身がまえる。台湾人だという。もう一度、確認。日本人は一人もいない。ひとまず安堵の胸をなでる。

と船から離れる。生活の尊さをもう一度祖国の友らに語らねばなるまい。

雨が激しくなってきた。私たちは次のコースに移るべくバスに乗る。バスの戸をたたき、物売りか。しきりに中に雨に濡れたまま3歳位の童児を背負った母らしき人が窓をたたき。何だろうと窓を開ける。思慮ふん別を忘れ、飴一袋を渡す。ニッコリと笑みを返す。全く一場面の風物か。

物乞う技術の教えか。私たちはこの国から多くのことわざ金言を教わった。しかし、武士は食わねど高楊枝ということわざはなかつたのだらうか。

ガイドさんが説明を加える。広州は、人口680万人で市長の報酬は3000元、(9、000円)で労働者の平均給が6、000円だと言う。さすがは共産圏で賃金の差は少ないようであるが、その平均給とは公務員のことであり、一般市民ははかり難い生活が予想される。中国航空にも電車

ではない火車にも乗せていただきました。まだまだ、我が祖国とは20年いや30年の差はあることでしょうか。何がそうさせたか。これを考えることに今回の視察旅行の意義があると確信いたします。いろいろお世話になりました藍玲さん、溪小梅さん、梁伯泉さん、あなた方が私たちを歓迎閣下光臨と迎えてくださることも結構ですが、私たちはあなた方を友好的親友として五日間を過ごして参りました。今度会うとき中国の良さを強調されますことを願います。

(教育委員会・斉藤要)